

## （何が出るのか）お楽しみ分科会

群馬：川島滋弘

□大会3日目の午前1コマ □提出資料数 9本 □参加者 約20人

### ◆はじめに

分科会数が40近くに上ようになってきた夏の大会。実行委員会側としては「冬の大会の全体会」をイメージしてこの分科会を設定しました。ある意味細分化され専門家集団による検討が主になっている中、正に「自分の資料の評価を一般大衆に問う」場所として、このような〈何が出てくるのかわからない、ごった煮的〉な分科会は面白い試みでしたが、事前にその意義について十分に告知できなかつたのは反省点です。しかし、結果として「人生哲学」に始まり、「科学オモチャとそのパフォーマンス」「心円祭という組織論」「大会資料代に関する哲学」「板倉研究法に関連した資料の整理術」そして「吸盤の歴史に関する基礎研究」と多岐にわたる発表があったのは収穫です。分科会を通して〈その分野の研究成果を積み上げていく〉という側面は薄いかもかもしれませんが、今後「アンコール分科会」との関連を含め、検討すべき新たな分科会提案だったと思います。

【発表資料】（発表順：コメントは川島の独断と偏見で付けました）

### ■私の生き方哲学入門—主婦と実験— 172 ペ冊子 岡山 木浪健二郎

配られた資料が、なんと172ページほどのきれいなガリ本。「主婦」「結魂」という言葉、夫婦同姓か別姓か、子育てや結婚生活をめぐる様々な葛藤場面において、これまでの常識的慣例に流されるのではなく、自分の頭で考え仮説実験の論理を大いに活用してきた木浪さんの半生を物語る、迫力のある資料です。文中に、新潟県魚沼市にある「科学の碑」に刻まれた言葉をもじって「結魂、それは大いなる空想をとまなう女と男に生まれ、討論・実験を経て、家族のものとなってはじめて真理となる」「結魂は、民主的な女と男のみに生まれ、自由で、平等で、平和な家庭を守り育てる」とあるのが目に留まりました。木浪さんの生き方のスタンスを如実に表している一文だと思いました。発表の中では（男偏の漢字がいかにか少ないか）で盛り上がりました。女偏の漢字は40コほどあるのに対し、男偏のつく漢字は「甥(おい) くらいしか少ないということ。その他に「甥(めおと)」「甥(なぶる)」「姪(たおまれる)」など。漢字文化を見ても男系社会になっているのが分かり、改めて気付かされたことがたくさんありました。

■科学オモチャ研究宣言 4ペ

■板倉先生とオモチャと私 8ペ

■水中花のこと 4ペ

■手のひらATM 4ペ

○その他、実演と販売パフォーマンス 愛知 市原 千明

「僕はね、昔オモチャの本を出そうとしたこともあるんです。ちょうど今新しい企画でね、オモチャを付けた本を出せないか検討中なんです（注：『いたずら博士の科学大好き（小峰書店）シリーズ』のこと）。オモチャは実物がないと遊べませんからね。教師だったら知っているといい、知らないと困る、そんな内容で書くんです。ちゃんとした使い方や背景、心理学的な面まで範囲を広げて。そんなオモチャの本はほとんどないでしょ。だからそういうものを作るんです。『オモチャの授業書作り』です」

という板倉先生の言葉に触発された市原さん。ご自宅を建て替えて改装したのをきっかけに、「科学オモチャトーク」という講座を開きながら研究を進めることにしたそうです。その宣言を綴った資料。その最後にある市原さんの言葉。

——私にとって《仮説実験授業》と「科学オモチャ」は「人の笑顔や幸せに寄与するもの」というくくりの中で、共になくてはならない車の両輪のような存在なのです……私の「科学オモチャ」は「仮説実験授業」への橋渡し。「なぜだろう？」とか「そうだったのか！」という「科学の楽しさ」をオモチャで味わい、その心を仮説実験授業につなげてゆきたい。急にいろいろなことはできないが科学の原理を教えるのが《仮説実験授業》だとするならば《科学の活用》を見せることができるのが科学オモチャなのではないか——

というのにすごく納得。その後は、市原さんの独演場！次々と繰り出される不思議なオモチャの数々とその実演。その場に来ていた参加者は正にオモチャの楽しさを体感することができました。ボクのおススメは「手のひらATM」です。大会終了後さっそく職員室で試しました。プールに来ていた子どもたちにも大うけ。板倉先生と住本さんのお見舞いの時にも持って行き、喜んでもらいました。

## ■第2回「心円祭」の報告 24ペ 群馬 川島 滋弘

「心円さん(仮説実験授業)に「楽しい生き方」を学んだ人たちが集う会だった」という感想文にますますやりがいを感じたという報告です。「記念館は仮実研会員の別荘でもあるのだから、多くの方に使ってもらいたい」ということなので、ぜひ使ってください。なお、伊香保大会における「ブラボー券の発行」「ラウンジコーナーの設置」「youtubeによる実況中継」の先駆けとして、「ブラボー投げ銭」「談話コーナーの充実」というアイデアを実験的に取り入れたのも心円祭でした。また、会を企画主催する・あらたな運営組織を提案するという意味では、組織論に関する資料ともなっています。

「組織」なんて言葉はまだ僕には馴染めないけれど、自分がやりたいと思った楽しみ事を始める時には一人の力では実現できそうにないこともある。どうせなら誰かを巻き込んで大勢で楽しみたい。巻き込まざるを得ない仲間、進んで巻き込まれてくれる仲間がどれだけいるか？そんな仲間に気持ちよく巻き込まれてもらえるような、そんな運営を考えるのは楽しそうだ。

とちよっぴり思索に耽る心円祭は、次回(来年)で一応の区切りをつける予定です。

## ■大会資料係から考えた 4ペ 群馬 森下 知昭

今大会の資料係を担当した森下さん。昨年の東京大会における分科会数と資料数・発表者数から「1人当たりの発表時間」を算出してくれました。このような考察はこれまでにな

かったのではないのでしょうか?すると「1人当たり20分ほどの発言する時間が確保されている」ということになるのだそうです。さらに続きます。

「〈要検討〉を希望すれば1人当たりの時間は多くなる。〈報告〉ならば時間は短い。しかし〈要検討〉にしても一人で180分を取るのには適切なのか?…分科会の目安として〈要検討〉の資料でも30分までしか取れない。それ以上使いたければ最初からナイターでやるのはどうか?とってしまう」

と森下さん(現実に今大会はナイターがとても盛んで、2日間でおよそ40本)。

さて、このような考察を進めるうちに資料代の算出にも応用したらいいのでは?と考えが及んでいったのです。〈一律に金額を決めて渡す〉のでもなく、〈ページ数×部数の重量で算出する〉のでもない新たな試みとは……。

伊香保大会での「お楽しみ分科会」「ブラボー券」「大会資料係へのお誘い」、さらにはラウンジコーナーの設置やお土産のバッグ、スタッフエプロンなど、そのどれもが、根底に森下さんのこの考察があったからこそ生まれたものだと言ってよいでしょう。今後の大会運営を考える際には一読しておきたい資料です。

## ■板倉聖宣 本を語る 25ぺ 東京 干台 治男

「まめ研」の研究がひと段落した後、調布の板研にある本をもとに板倉さんに本について語ってもらう会が始まりました。その第1回から3回目までの記録です。干台さんのテープ起こしによる貴重な板倉談話は、話題があちこちに飛びその編集にかなり苦労された様子ですが、その脱線話がまた面白いです。

5月6日に行われた第1回は、板倉研究法の真骨頂でもある資料の整理の仕方について語られています。「研究者にとってまず必要なものは印刷機と製本機だ。コピーを取ったら必ず製本する。紙を整理することは頭を整理することだ」と。

その場にいた塚本浩司さん(千葉)も「そうそう、僕も大学の研究室に入ってから最初にやらされたことは資料のコピーでした。コピーしたのをまとめたりするうちに内容をちらちらと読んでいますね。背表紙を付けたり木口を色分けしたりね…つまり作業しながら研究しているのです」と言っていました。その後の内容については干台さんの資料から見出しを拾っておくことにします。

- ・「第1回板倉聖宣本を語る」○はじめに ○まず研究に必要なもの ○百科事典は読み物だ ○大正デモクラシー
- ・「第2回よい本・悪い本(?)」○まえがきというか前もつのお断り ○『科学大観』にまつわる話 ○『科学の歴史』(小学館刊)『人名事典』(三一書房)の話から ○『教育学事典』(岩波書店刊)の話 ○脱線 科学史をはじめようとしたとき
- ・「第3回科学技術体系(第一法規)を中心にして」(第3回の記録には見出しはない)

最後に干台さんからこんな一言がありました。

「板倉さんは、なにも本について語らなくていいから、早く元気になってそこにいてくれればいいんです。僕らは板倉さんがいてくれるだけでいい。ぜひ板研へみなさんもいらしてください」

## ■吸盤とsuckerのルーツについて 3ペ 千葉 塚本 浩司

「はじめは物性分科会に出そうかと思っていたけれど、あまりにも人数が多くて…」の一言から始まった発表。配られた資料を見て僕は「おお、最後に来てぐっとアカデミックな雰囲気！正にこの〈お楽しみ分科会〉にうってつけの資料ではないか!」と思ってしまいました(笑)。研究会内部でも知られていますが、【どこでも吸盤(とんでも吸盤)】(高橋信夫氏作成)の、教材としての素晴らしさを後押しするような資料です。「吸盤」という言葉から得られるイメージ(吸う)ではなく、「大気圧なんだ!」ということを裏付ける内容に納得。「吸盤」のルーツは、1800年代から子どもたちの間で〈大気圧あそび〉として普及していた“sucker”。皮をしめらせたものに紐を付けて、地面の石ころめがけて投げつけ、それを持ち上げ「どうだい、すごいだろ?!」と自慢し合う子どもたちの姿。その挿絵も見せてもらいましたが、とても楽しそう。もともとは動物の皮で作ったもの。現在のような吸盤になったのは1800年代になってゴムが発明されたころだそうです。なんとハエの足も吸盤になっているという話には一同ビックリ!

塚本さんの発表を聞きながら「楽しみごと(あそび)としての科学」「大衆に問いかける」という言葉が浮かび、はじめの市原さんの発表ともつながり「いい分科会だったなあ!」とますます思った次第です。

### ◆分科会参加者の感想

- 5: いやーまさに「お楽しみ」な分科会でした。木浪さんの発表は聞けなかったけど、市原さんの独演会、大笑いで楽しめました。いかに〈たのしみごと〉と向き合うか、いろいろ考えることができました。設定ありがとうございました。
- 5: 「科学オモチャ研究宣言」がおもしろかった。簡単にできる材料でみんなを楽しませる。そしてオモチャの哲学も教えていただきました。「心円祭の報告」もよかったですよ。主催者が楽しんでいる様子が資料から伝わってきました。来年も参加しなくちゃ。
- 自分の研究は「マジメ」に「楽しさ」を追及しているつもりです(´-`)。このような「お楽しみ」分科会があったおかげで楽しく発表ができました。ありがとうございます。
- 途中からの参加ですが、大会運営の方の苦労が分かりました。また、現在の板倉研究室のことや先生の本のお話が伺えてよかったです。吸盤はハエの足まで!という驚きがありました。ありがとうございました。
- 資料『私の生き方哲学入門』をどの分科会で発表すればいいのかわかっていましたが、こんなに楽しい分科会で発表できてとても嬉しいです。ものづくり・手品、力学などなど、種々な分野から思いもよらぬ資料発表があり、参加して本当によかった。こんなに楽しい分科会を作ってくださいありがとうございます。
- 5: 「お楽しみ分科会」というネーミングにつられて参加しました。市原さんの〈オモチャ〉、木浪さんの〈主夫業〉、川島さんの〈心円祭〉、森下さんの〈資料代の出し方の基準〉、千台さんの〈板倉さんの研究の作法〉の紹介、塚本さんの〈吸盤の研究〉など、バラエティーに富んでいて、とても楽しかった。
- 5: おもしろかったです! 後半だけでしたが、多彩で、でも困らしかったです。総会での声かけが「その他か〜」ではなく「いろんな発表があるからこそ面白そう!!」と思えるものでとてもよかったです。「お楽しみ」分科会、イデスネ!!